

小学校外国語活動から中学校英語授業へ — 鳴門市立大麻中学校の実践 —

小野 章・齋藤 智子*
(2012年12月7日受理)

For a Smooth Transition from Elementary School Foreign Language Activities to Junior High School English: Principles and Practices in Oasa Junior High School

Akira ONO and Satoko SAITO

Abstract. Oasa Municipal Junior High School in Naruto City experimentally studied the ways of securing a smooth transition from elementary school foreign language activities to junior high school English. This paper aims to report the study done between April and October 2011. The study took the following three steps: (1) analysis of first-year junior high school students through a questionnaire survey and classroom observations conducted in April and May; (2) analysis of the foreign language activities through classroom observations (conducted in May and June) in four elementary schools whose graduates enter Oasa; (3) examination of the effects of the teaching methods that were developed from the analyses done in (1) and (2). The study concludes that the following five principles would be useful when junior high school teachers try to secure a smooth transition from elementary to junior high school:

1. Foster students' enthusiasm for knowledge and self-expression that they felt in elementary school foreign language activities.
2. Develop teaching contents in elementary school foreign language activities.
3. Develop teaching methods in elementary school foreign language activities.
4. Make learning enjoyable by making students feel a sense of achievement.
5. Integrate the four skills in English activities.

1. 研究の背景

平成23年度より小学校外国語活動が必修化された。様々な可能性を秘めた同活動であるが、諸課題があることも事実だ。それらの課題のひとつが小中連携であろう。『中学校学習指導要領解説外国語』も、「小学校における外国語活動と中学校における外国語科の学習との円滑な接続が図られるよう、第1学年では小学校段階での外国語活動を通じて育成された素地を踏まえることへの配慮」が必要であるとしている。では、一体どのような点において小学校と中学校は連携を図ることが可能なのだろうか。

全国的には平成23年度から外国語活動は全面实施となったわけであるが、鳴門市では平成17

年度から同活動が始められており、例えば平成23年度入学の中学1年生は、小学校5、6年時の2年間で計50時間以上の活動を経験している（表1参照）。

また、同市では、平成21年度に「小中高連携外国語教育研究委員会」が設立されたこともあり、異校種間の授業参観や、情報交換が可能となっている（図1参照）。

以上のような鳴門市の先行的な取り組みを受け、本論では、平成23年度における鳴門市立大麻中学校（筆者のひとりである齋藤の平成21～23年度の勤務校）と、関連の小学校間における小中連携を扱う。

*徳島県海陽町穴喰中学校

表1 鳴門市の外国語活動推進経過

	授業時間		担当組織
第1ステージ (H17～H18)	全学年	年3～4時間	小学校専属ALT活用検討委員会 小学校外国語活動担当者会
第2ステージ (H19～H20)	低・中学年 高学年	年3～4時間 年7時間	鳴門市外国語活動研究委員会 (市内全小学校+中学校代表教員+大学+市教委)
第3ステージ (H21～H22)	低・中学年 高学年	年3～4時間 年20～35時間	鳴門市小中高連携外国語教育研究委員会 (市内全小中高専修学校+大学+市教委)
第4ステージ (H23～)	低・中学年 高学年	年3～4時間 年35時間	

*鳴門市には、17小学校、7中学校がある。

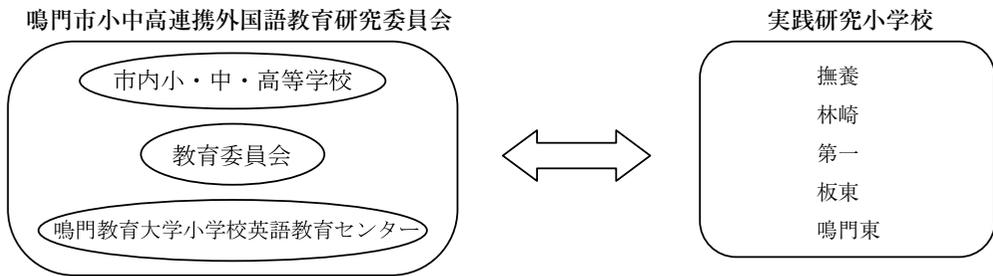


図1 鳴門市の外国語活動・教育連携推進組織

2. 研究の目的と方法

研究の目的と方法は以下の通りである。

研究目的

- ・小学校外国語活動を経験した中学校1年生を対象に、英語学習入門期の指導の在り方を探る。

研究方法

- (1) 大麻中学校1年生の入学直後の実態を、アンケート調査と授業観察を通じて把握する(平成23年4, 5月)。
- (2) 大麻中学校の校区内にある4小学校の授業観察を通して、小学校外国語活動の実態を把握する(平成23年5, 6月)。
- (3) (1)と(2)の結果から得た示唆を元に授業改善を試みた上で、その成果をアンケート調査と授業観察から明らかにする。

- (1)入学直後に取ったアンケートと(2)入学直後の授業観察から探ることにした。

3.1.1. 中学校入学直後のアンケート調査

大麻中学校入学直後の平成23年5月中旬にアンケート調査を実施した(アンケート作成者、実施者とも齋藤)。実際のアンケートは全8項目によって構成されていたが、ここでは第1項目の「あなたは中学校での英語の授業は楽しいと感じますか」に対する回答のみを取り上げる。なお、アンケートは記名によって行われ、全部で30名の生徒から回答が得られた。実際のアンケートの第1項目は次の通りである。

アンケートの第1項目

Q1 あなたは中学校での英語の授業は楽しいと感じますか。				
とても	まあ	あまり	まったく	
楽しい	楽しい	楽しくない	楽しくない	
1	2	3	4	
あなたが○をつけた回答について、そう思う理由をいくつでも自由に書いてください。				

3. 研究の実践

3.1. 大麻中学校1年生の入学直後の実態把握

平成23年度入学の大麻中学校1年生の実態を、

この質問項目に対し、「とても楽しい」か「まあ楽しい」と肯定的に回答した生徒は全体

の83%であった。理由のうち、主なものは次の通り。

- ・クイズやゲームなどがあって楽しいから。
- ・「聞く・話す」活動が楽しいから。
- ・小学校の時から英語が好きだから。
- ・中学校では、英語を書くなど、小学校の時より詳しく勉強できるから。

一方で、「あまり楽しくない」か「まったく楽しくない」と否定的に回答した生徒は17%であった。主な理由は以下の通り。

- ・話すのは楽しいけど、書くのは少し面倒だから。
- ・文法など覚えることが増えてきたから。
- ・英語がわからないから。

これらの回答から概ね言えるのは、中学校での授業が楽しいのは、それが小学校での外国語活動の延長である場合であり、逆に楽しくないのは、それがスキルの習得等に関わる場合であるということである。ただし、書くことなど、小学校では行わなかった活動に関心を持っている生徒が居るのも事実である。

3.1.2. 中学校入学直後の授業観察

4、5月に齋藤が実践した授業を、授業者自身が観察した結果、以下の通り、小学校外国語活動の影響を受けていると思われる点があくつか見えて取れた。なお、授業は週3回行われ、生徒数は30名であった。

- ・ALTと積極的に関わろうとしている。
- ・ゲーム感覚で取り組める活動を好んでいる。
- ・英語による指示（クラスルーム・イングリッシュ）に慣れている。
- ・小学校で慣れ親しんだ英語表現を使おうとしている。
- ・自分のことについて表現することを楽しんでいる。

小学校外国語活動で体験したと思われることについては積極的であり、これは、入学直後に

実施した前述のアンケート調査の結果を裏付けるものであると言える。

3.2. 小学校外国語活動の観察

前節（3.1. 大麻中学校1年生の入学直後の実態）から言えるのは、小学校外国語活動の諸要素を中学校の英語授業にうまく取り入れていくことが、中学生の英語に対する関心・意欲・態度を維持、向上させることにつながるということである。では、具体的にどのように取り入れるべきか。それを探る目的で、齋藤は、大麻中学校の校区内にある4小学校の外国語活動を平成23年5～6月にかけて観察することにした。観察回数は計4回で、観察対象となった学年は4～6年生であった。以下が観察結果のまとめである。

1. 児童は「知りたい・伝えたい」という思いを持っており、またその思いを教員も大切にしている。
2. 教員には、児童一人ひとりを大事にする姿勢や、活動を通した仲間作りへの配慮が見られた。
3. 活動内容や教材に、誰もが意欲的に取り組める工夫がある。
4. 友達と関わりながら行うタスクやゲームが豊富である。
5. ゲーム感覚で同じ表現に何度も触れる機会があり、自然な場面の中で音声に慣れ親しむ工夫がされている。
6. 教員はクラスルーム・イングリッシュを積極的に取り入れており、それに対し児童も慣れている。
7. 補助的に文字が使用される場合があったが、その文字に興味を示す児童がいる。

小学校外国語活動のこれらの特徴は、教え・学びの姿勢に関わるもの（1と2）指導内容に関わるもの（3と4）、指導方法に関わるもの（5～7）、の3つに大別されよう。

3.3. 中学校における授業の改善

前節（3.2. 小学校外国語活動の観察）では小学校外国語活動の3つの特徴に触れた。それら3つの特徴を基に、小学校外国語活動を中学校の英語授業に活かす目的で、次のような3つの指導方針を中学校で立てることにした。

- ① 小学生時に抱いた「知りたい・伝えたい」という生徒の思いを大切にします。
- ② 小学校の指導内容を中学校につなげる。
- ③ 小学校の指導方法を中学校につなげる。

また、これら3つの指導方針を基に、10項目から成る中学校英語授業改善案を作成した。さらには、それらの改善案に沿って、6月末～10月末まで中学校で授業を実践し、小学校外国語活動を中学校英語に活かすよう試みた。指導方針①, ②, ③の順番に、授業改善案を表で、授業実践例を図で下に示す。

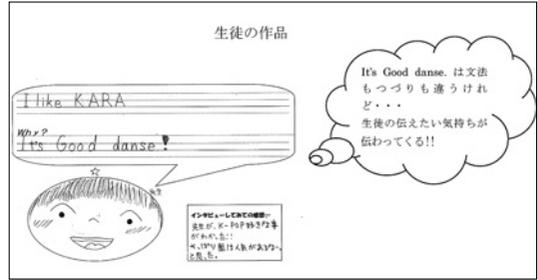


図3 改善案3の授業実践例

3.3.1. 指導方針①に基づいた中学校の授業改善案と授業実践例

表2 指導方針①に基づいた中学校授業改善案

指導方針	中学校授業改善案
①小学生時に抱いた「知りたい・伝えたい」という生徒の思いを大切にします。	<p>改善案1：生徒に、自分の思いを伝えたいと思わせるような題材や活動を入れる。(授業実践例については下の図1参照)</p> <p>改善案2：コミュニケーションの相手・目的を明確にする。(図1参照)</p> <p>改善案3：教員は、細かな添削をすぐに行わず、まずは生徒に自由に表現させる。(図2参照)</p> <p>改善案4：生徒が使いたいと思う表現や単語を、未習でもすぐ与える。</p>

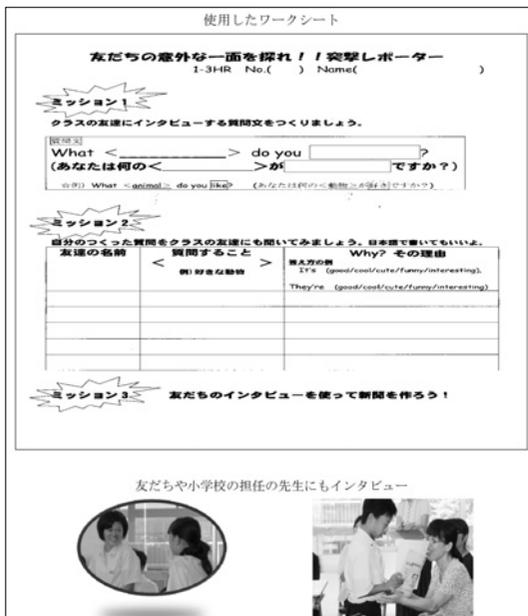


図2 改善案1と2の授業実践例

3.3.2. 指導方針②に基づいた中学校の授業改善案と授業実践例

表3 指導方針②に基づいた中学校授業改善案

指導方針	中学校授業改善案
②小学校の指導内容を中学校につなげる。	<p>改善案5：小学校で慣れ親しんだ表現の導入の際には、実際に体験してきた活動場面を思い出させる。(図2参照)</p> <p>改善案6：小学校で使われていた教材や教具を活用する。(図2参照)</p>



図4 改善案5と6の授業実践例

3.3.3. 指導方針③に基づいた中学校の授業改善案と授業実践例

表4 指導方針③に基づいた中学校授業改善案

指導方針	中学校授業改善案
③小学校の指導方法を中学校につなげる。	<p>改善案7：文字への興味を辞書指導につなげる。(図5参照)</p> <p>改善案8：「聞く・話す」活動から「読む・書く」活動につなげる→文字によって正確さを高める。(図5参照)</p> <p>改善案9：ゲーム感覚で表現練習を繰り返させる。</p> <p>改善案10：クラスルーム・イングリッシュを積極的に取り入れ、英語での授業を当たり前にする。</p>

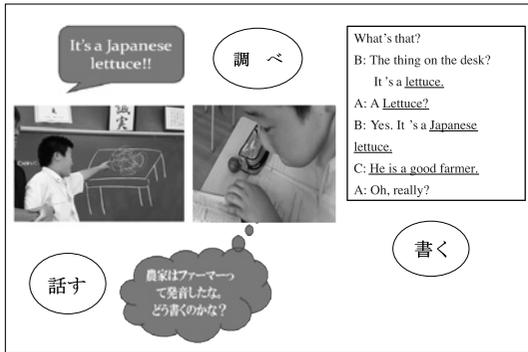


図5 改善案7と8の授業実践例

4. 研究の成果

前章（3. 研究の実践）で触れた通り、小学校外国語活動を中学校の英語授業に活かす目的で、3つの指導方針を中学校において定めた。さらには、10項目から成る授業改善案も作成し、それらに基づいて6月末～10月末まで中学校で実際に授業を行った。夏休みを除く約3ヵ月間の成果を本章では報告したい。なお、成果は、授業観察とアンケート調査（3.1.1. で触れた「中学校入学直後のアンケート調査」と同一のものを10月末に実施）によって測ることとした。以下、3つの指導方針の順番に見て行く。

指導方針①「小学生時に抱いた「知りたい・伝えたい」という生徒の思いを大切にする」について中学校で授業改善を試みた結果、次のような成果が得られた。

- ・英語学習への意欲が持続・向上している。
- ・辞書を用いたり、質問したり、ジェスチャーを使ったり、様々な手段を駆使しながら自分の思いを伝えようとしている。
- ・自分の意見をしっかり考える姿勢があり、発想も豊かである。

これらの成果のうち、はじめの「英語学習への意欲が持続・向上している」という点については、アンケート調査では次のような変化が見られた。つまり、アンケート項目「あなたは中学校での英語の授業は楽しいと感じますか」に対し、肯定的に回答した生徒が、5月末の時点では全体の83%だったのが、10月末には89%とわずかながら増加した。

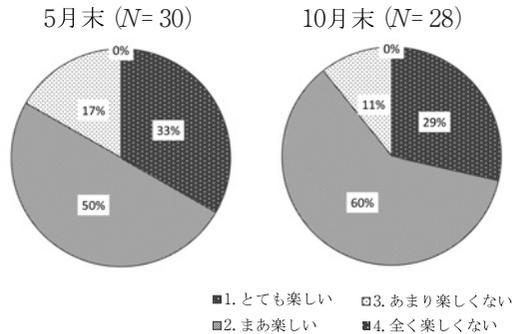


図6 アンケート項目「あなたは中学校での英語の授業は楽しいと感じますか」での変化

指導方針②「小学校の指導内容を中学校につなげる」について中学校で授業改善を試みた結果、次のような成果が得られた。

- ・新出文法や表現が言語の使用場面と結びついた。
- ・新出文法への導入時間が短縮し、文字で表現確認をさせる時間が十分とれた。

指導方針③「小学校の指導方法を中学校につなげる」について中学校で授業改善を試みた結果、次のような成果が得られた。

- ・活動において、教員による英語の指示をスムーズに理解している。
- ・ゲームの要素を活動に取り入れることで、理解度が不十分な生徒も意欲的な姿勢を見せるようになった。
- ・音声を文字で見直すことが習慣となり、書くことへの意識が高まった。

このように、3つの指導方針に従って小学校外国語活動を中学校英語授業に取り入れることで、中学生の学習効果が全体的に高まったと言える。

5. 小学校外国語活動を超えて

小学校外国語活動を中学校英語授業にいかに関与するかをここまで論じてきた。そのことに加え、本研究では、小学校外国語活動を踏まえつつも、それを超えたところで展開すべき中学校英語授業についての示唆も得られた。本章ではそれをまとめる。

小学校外国語活動を中学校英語授業に取り入れることで、全体的には学習効果が高まったものの、学習内容が進むにつれ、授業を難しいと感じる生徒が増えていることも、授業観察から見て取れた。前述のアンケート結果からも、特に、英文を書くことや単語のつづりを覚えることなど、「書くこと」に対する不安が高いことがわかった。同アンケートの項目7とそれに対する回答(10月末現在)を以下に示す。

アンケートの第7項目

Q7 英語の学習について、あなたが今勉強する必要があると考えることはどのようなことですか。優先順位の高い順に番号を3つ書いてください。

1. アルファベットを正確に覚える	2. 単語のつづりを覚える
3. 単語の読み方を覚える	4. 単語の意味や使い方を覚える
5. 単語や英文の発音練習	6. 英語の文を読む(分かる)練習
7. 英語の文を書く練習	8. 英会話の練習
9. 筆記体を覚える	10. いろいろな国の言葉を知る
11. その他(具体的に:)	

①	②	③
---	---	---

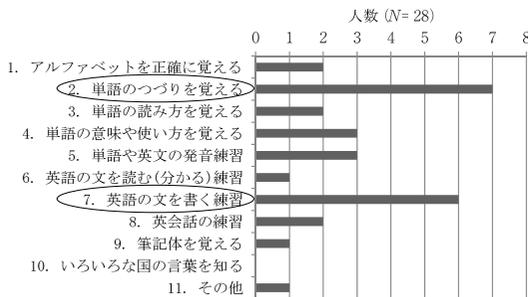


図7 生徒が「今勉強する必要がある」と考えていること
* 優先順位1位に挙げられたもののみ掲載

図7中、丸で囲っている通り、「英語の文を書く練習」と「単語のつづりを覚える」が高い数値を示しており、「書くこと」に関わる学習が必要だと生徒は認識しているようである。しかし、それは、小学校外国語活動では経験しなかったこと、あるいは同活動より高度なことが楽しくないことを意味するのではなさそうである。次に、アンケート項目8とそれに対する回答(10月末現在)を示す。

図8にあるように、「簡単な英会話」や「友達にインタビュー」といった音声に関わる比較的簡単な活動に加えて、より高度な「英問英答」や、文字を使用する「教科書の本文を読む活動」や「ワークの問題」も上位に挙げられたことは注目に値する。以下は、「英問英答」、「教科書の本文

アンケートの第8項目

Q8 英語の授業中の学習について、あなたが今楽しいと感じる活動はどのようなことですか。楽しいと感じる順にその番号を3つ書いてください。

1. 簡単な英会話をする活動	2. 単語の発音をする活動
3. 友達にインタビューする活動	4. 教科書の本文を読む活動
5. 単語を書く活動	6. 英語の質問に英語で答える活動
7. 英語で自由に書く活動	8. ワークの問題を解く活動
9. 英語で自由に話す活動	10. 英語で大まかな内容を聞き取る活動
11. 英語で聞きとった単語を書く活動	12. 英語で作品づくりをする活動
13. その他(具体的に:)	

①	②	③
---	---	---

また、その順番でそれぞれの活動を選んだ理由を書いてください。

* 教科書はSunshine (開隆堂)、ワーク(ブック)は『新英語のワーク』(明治図書)を使用。
* 選択肢6は「教科書に掲載された、英語による問題」である旨、口頭で生徒に伝えた。

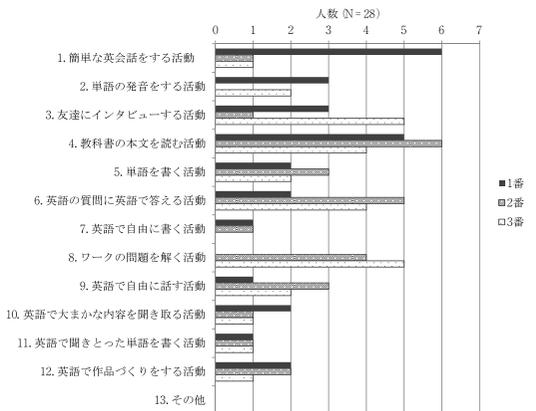


図8 生徒が「今楽しいと感じる活動」

を読む活動」、「ワークの問題」と回答した生徒が自由記述欄に書いた理由のまとめである。

表5 「今楽しいと感じる活動」

今楽しいと感じる活動	理由
英問英答	・英語の質問を考えて、それがわかったら達成感があるから。
教科書の本文を読む活動	・英語が嫌いでも、友達と音読するなら楽しくできるから。 ・読めないと思った単語が言えたとき、嬉しいから。 ・本文を読んで、意味を読み取れたら嬉しいから。
ワークの問題	・単語の一つ覚えられたらすごく実感がわくから。 ・ワークの問題で自分の理解度がわかるから。

表5の理由を概観すると、楽しさには、「わかった」・「出来た」という「実感」・「達成感」が重要であることが分かる。この楽しさは、活動内容から考えて、ゲーム的要素を取り入れた小学校外国語活動の楽しさとは趣を異にするとと言える。肝要なのは、これら2種類の楽しさの双方を中学校の英語授業に取り入れることであろう。

さらに表5から分かるのは、文字を見ながら英単語を発音したり・その意味やつづりを覚えたりすることや、英文を音読したり・それを読解したりすることといった、小学校外国語活動では経験しなかったことも、決して否定的には受け取られていないことである。小学校外国語活動における音声指導から文字指導へのスムーズな移行、4技能のいわゆる総合と統合が中学校には求められていると改めて感じた。

以上、小学校外国語活動を踏まえつつも、それを超えたところで中学校が展開すべき英語授業の指導方針として、(1)学習内容をしっかりと理解させ、達成感を抱かせることで楽しいと思わせること、(2)4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用させること、の2点を提案したい。

6. まとめ

本論では、アンケート調査と授業観察を基に、小学校外国語活動を中学校英語授業に活用する方策を探った。そして、3つの指導方針に従って中学校の英語授業を実践することが効果的であると結論に至った(下の①~③)。

本論では、小学校外国語活動を踏まえつつも、それを超えたところで中学校が展開すべき英語授業の指導方針として、さらに2点を提案した(下の④と⑤)。

計5つの指導方針を、英語学習入門期の指導の在り方として提案し、本論のまとめとしたい。

- ① 小学生時に抱いた「知りたい・伝えたい」という生徒の思いを大切にすること。
- ② 小学校の指導内容を中学校につなげる。
- ③ 小学校の指導方法を中学校につなげる。
- ④ 学習内容をしっかりと理解させ、達成感を抱かせることで楽しいと思わせる。
- ⑤ 4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用させる。